

塚 煙 遺 跡

—緊急発掘調査報告書—

1976

伊那市史編纂委員会

伊那市教育委員会
関東農政局伊那西部
農業水利事業所

塚 畑 遺 跡

—緊急発掘調査報告書—

1976

伊那市教育委員会
関東農政局伊那西部
農業水利事業所

序

以前より、私は原始時代の考古学について多くの関心をよせていました。特に、信州伊那谷には各地に遺跡、古墳が見られ、郷土文化発祥を証明するかのような状況であります。

このような先人達が営んだ生活の場が遺跡であり、また先人達が埋葬された場が古墳であります。これらの所産物を地下に破壊されることなく埋めておくことが最ものがましい姿であります。社会の動勢によって、いつまでも、そのような状態におくことが不可能な事態がここ数年来、伊那谷に押し寄せてまいりました。それは中央道開通、各種の土地改良事業であります。

今回の西箕輪大泉新田塚畠遺跡（縄文中期時代の単独遺跡）は西部開発事業に伴なう送水管工事のために消滅されるようになります。上伊那考古学会をはじめとする各種学術団体より、その価値が指摘され、調査の運びとなつた次第であります。

調査は昭和50年10月中に実施されました。調査にあたりましては上伊那考古学会の諸先生並びに関東農政局伊那西部農業水利事業所職員一同の心からなる御協力により調査が完了したことにして深甚なる感謝を呈する次第であります。

昭和51年3月10日

伊那市教育委員会

教育長 松沢一美

凡　　例

1. 今回の発掘調査は西部開発に伴なう、西部送水管事業で、第1次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、西部送水管事業に伴なう緊急発掘で、事業は関東農政局伊那西部農業水利事業所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和50年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

小池 政美

◎ 図 版 作 製 者

・遺構及び地形実測図 友野 良一、小池 政美

◎ 写 真 摄 影

・発掘及び遺構 友野 良一、小池 政美

・遺 物 友野 良一、小池 政美

5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。

目 次

序

凡 例

目 次

挿図目次

表 目 次

図 版 目 次

第Ⅰ章 遺跡の環境.....	(1~4)
第1節 位 置.....	(1)
第2節 地形・地質.....	(2~3)
第3節 歴史的環境.....	(2~4)
第Ⅱ章 調査の経過.....	(5~7)
第1節 保護措置の経過.....	(5)
第2節 発掘調査の経過.....	(6~7)
第Ⅲ章 遺 構.....	(8~9)
第1節 土 拂.....	(8)
第Ⅳ章 遺 物.....	(9~14)
第1節 土 器.....	(9~12)
第2節 石 器.....	(13~14)
第Ⅴ章 所 見.....	(15)

挿図目次

第1図 西箕輪地区遺跡分布図	(3)
第2図 遺跡地附近の構図	(8)
第3図 遺構配置図	(9)
第4図 第1号土払実測図	(9)
第5図 第1号土払出土土器拓影	(11)
第6図 遺構外出土土器拓影	(12)
第7図 石器実測図	(14)

表目次

第1表 西箕輪地区遺跡一覧表	(4)
----------------	-----

図版目次

図版1 遺跡全景

図版2 大泉川とグリット状況

図版3 遺物出土状況と遺構

第Ⅰ章 遺跡の環境

第1節 位 置

塚畠遺跡は長野県伊那市大字西箕輪大泉新田 2104, 2106—イ, 2106—ロ, 2106—ハ, 2107, 2326—1 附近の番地に、また、蔵慶山や経ヶ岳山麓にその源を発す大泉川の左岸段丘（標高 800m 前後）に位置している。大泉新田は名の示す如く、新しい集落は遺跡地より北へ約 50m 程行った附近に密集している。遺跡地の現況は畑作であり、扇状地と大泉川の段丘面の為に堆積土が厚く、軽く 1m を越していた。

塚畠遺跡に至るまでの経路は二つの場合が考えられる。まず一つとして、国鉄飯田線伊那市駅を下車して、北へ向って国道 153 号線を約 4.5km 程行って、北駿駅付近で、西へ 4km 程行くと目的地に到着する。もう一つとしては、伊那市駅を下車して、西方へ向って、大萱・荒井線を 4km 程通り、信州大学農学部を通過し、西箕輪支所付近にて西箕輪、辰野線を北へ 3km 程行くと吹上部落に出る。こここの道順の途中に羽広部落がある。吹上部落より大泉川に沿って東へ 1.5km 下ると目的地に達する。

第2節 地 形 地 質

発掘地点を地形的に概見してみると、大きくは天竜川の竜西地区大泉段丘面、また、木曾山脈の一部である経ヶ岳の北に展開する扇状地、小さくみれば、大泉川の河岸段丘突端部に位置している。大泉段丘を上伊那郡誌自然篇により詳細に述べてみると、次のようである。『現河床から 15~25m 内外の高さで、扇頂部では標高 900m ぐらいから、かなりの傾斜をもって天竜川に傾斜する面で、疊層中に小坂田ロームの浮石帶がはさまれている。小坂田ロームの上部層と波田ロームに覆われているもので、堆積段丘である。すこぶる広大なもので、上伊那郡の北部から伊那市に及び、次第にその幅を増している最も幅広い面である。』

発掘地点は、大泉川の左岸段丘先端部にあたり、天竜川による大泉段丘と扇状地のいわゆる複合扇状地に位置している。遺物は、黒土層や疊層の中に多数発見された。前者の出土状態は遺跡

第Ⅰ章 遺跡の環境

に直接的に関係が濃厚と思われるが、後者のは上からの押出しの線が強いように思われる。後者の疊層は大泉疊層と呼ばれているものであり、この疊層について上伊那郡誌を引用すれば次のようである。『伊那谷北部のいちばん広大な竜西地域の扇状地をつくっている疊層で、これを大泉疊層とよぶ。この疊層は、小沢川の中流与地付近大泉川の上流大泉付近、帶無川の上流等に見られる。厚さは、20mm内外で、下位には、数枚の浮石層（火山灰の軽石）がはさまれている。この扇頂部、たとえば小沢川の中流与地付近では、よく連続した粒度によって何層かに分けられる粗い疊層である。この疊層の岩種は、木曾山脈の経ヶ岳以北の岩種であるが、花崗岩も多く円疊として含まれている。』

最後に、大泉川の氾濫変遷について述べてみると、遺構の検出された低位段丘面に関しては、縄文中期時代には、その動きは希薄であったように思われる。

第3節 歴史的環境

西箕輪地区は経ヶ岳山麓、標高760m位から1,000m附近までにわたって各時代の遺跡が分布しているが、その標高差による時代的な差違は顕著ではない。また、分布地域が、遺跡分布図を参考にすれば一目瞭然であるが、大体4カ所に分類できる。

①～⑤は大泉川周辺、⑥～⑩は大清水川、⑪～⑯、⑰～⑲は山麓扇状地上、⑳～㉑は無名の多くの沢が入っている場所等であり、いずれにしろ、水利の便の良好な場所に集中していることを疑う余地は全くない状態であります。遺跡分布の内訳は旧石器時代3、縄文中期時代24、縄文後期時代2、縄文晚期時代1、弥生後期時代3、土師器時代6、須恵器時代8、灰陶陶器時代4、中世時代2である。

（小池 政美）

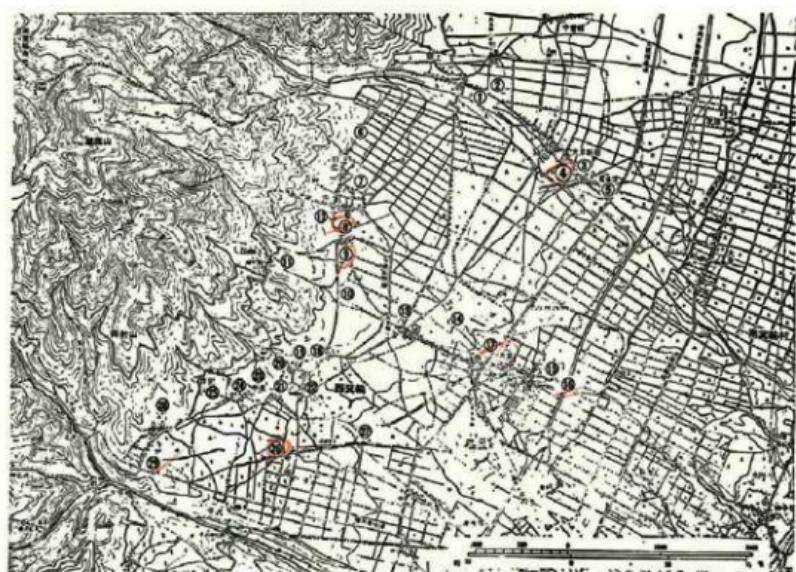
参考文献

長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（伊那市内その2）昭和48年度

上伊那誌（自然篇）

上伊那誌（歴史篇）

第Ⅰ章 遺跡の環境



第1図 西箕輪地区遺跡分布図

遺跡の名称

- | | | | |
|-----------|----------|--------|---------|
| ① 中道南 | ② 桜畠 | ③ 久保田 | ④ 堀畠 |
| ⑤ 高根 | ⑥ 北瀬 | ⑦ 田代 | ⑧ 古屋敷 |
| ⑨ 金鋳場 | ⑩ 上溝 | ⑪ 藏鹿山麓 | ⑫ 經ヶ岳山麓 |
| ⑭ 西箕輪小学校北 | ⑮ 伊那養護学校 | ⑯ 熊野神社 | ⑯ 庄家 |
| ⑯ 大萱四 | ⑰ 駿屋敷 | ⑱ 宮垣外 | ⑰ 天庄1 |
| ㉑ 天庄2 | ㉒ 上戸 | ㉓ 富士垣外 | ㉔ 堀の内 |
| ㉕ 小花岡 | ㉖ 中の原 | ㉗ 下の原 | ㉘ 与地山手 |
| ㉙ 与地原 | | | |

第Ⅰ章 遺跡の現状

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代		弥生時代		古墳時代		奈良・平安時代		中世 陶磁	備考 (長野県遺跡 地図番号)	
				草	早前	中	後	晚前	中	後	土須	土須		
1	中道南	西箕輪吹上			○									
2	桜畑	*			○									
3	久保田	大泉新田			○						○			
4	塚畑	*			○						○			
5	高根	*			○									
6	北割羽庄				○				○				(2602)	
7	田代	*			○				○				(2601)	
8	古屋敷	*			○				○				(2600)	
9	金崎場	*			○						○		(2599)	
10	上溝	*				○	○			○	○	○	○	財本と同じ
11	藏鹿山麓	*	○											
12	経ヶ岳山麓	*									○		和鏡	-
13	西箕輪小学校北	大萱								○				
14	伊義護学校	* 8274	○							○				
15	熊野神社	*				○				○	○		(8678)	
16	在家	* 7438～7444外			○								(8679)	
17	大萱西	*	○		○									
18	嚴屋敷	梨ノ木			○					○	○		(2608)	
19	宮垣外	中条			○	○				○	○	○	(2607)	
20	天庄1	上戸			○					○	○		(2606)	
21	天庄2	*			○									
22	上戸	*			○									
23	富士垣外	中条			○									
24	棚の内	*			○									
25	小花岡	花岡			○	○				○	○		(2605)	
26	中の原	中の原			○									
27	下の原	上戸			○									
28	与地山手	与地			○									
29	与地原	*			○								(2609)	

第1表 西箕輪地区遺跡一覧表

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 保護措置の経過

西部開発事業の一環として、竜西地区に送水管を農林省直轄のもとに附設する計画が実施される運びとなった。伊那市に於いては、西箕輪、西春近地区がこれに該当し、本年度は手始めとして、西箕輪大泉新田塚畠遺跡があたるということで、発掘調査を実施するようになった。

9月30日 関東農政局伊那西部農業水利事業所長と伊那市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備に着手した。

塚畠遺跡発掘調査会

〔調査委員会〕

委員長	松沢 一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井 喜夫	伊那市教育委員長
"	向山 雅重	長野県文化財専門委員
"	木下 衛	上伊那教育会会长
"	辰野 伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松 英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
"	石倉 俊彦	" 課長補佐
"	井上のり子	" 主事

〔発掘調査団〕

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会員
	御子柴泰正	"
調査員	小池 政美	"
"	辰野 伝衛	"

第II章 調査の経過

調査員 福沢 幸一 長野県考古会会員

" 赤羽 義洋 国学院大学学生

第2節 発掘調査の経過

昭和50年10月6日 発掘調査に是非とも必要な器材の運搬と、テント張りを主たる作業とした。

昭和50年10月7日 本日より調査を開始する。まず水路の予定線の境界に青テープを張って地主とのトラブルを防ぐよう努める。グリット番号は土手に近いところから（つまりこれがセンターくらい）となるところより、東側から西側にかけてA~B、南から北にかけて1~31と決める。この方法は1辺が2m×2mのグリット方式を採用してみる。

本日はA2、A4、A5、A8、A10の5ヵ所のグリットを掘りあげる。現在は、畑地のために水平にしたと思われるが、原地形はA2~A7にかけて急傾斜であり、しかも疊層の堆積が異々となっていた。A10付近より疊層がなくなり、またフラットな土層堆積になってきたA10より繩文中期の土器片が3片発見された。

昭和50年10月9日 A10、A12、A13、A14のグリットを掘り下げる。A13~A14に遺物が多量に集中していた。これは、いずれも縄文中期土器片であった。この付近の土層堆積は水平状態であり、層序は耕土、黒

土、褐色土、黄褐色土で、
疊層の堆積はなかったが、
黄褐色土層にいたっては砂
質の含有量が非常に多かっ
た。いずれにしろ出した
土層と疑がっても相違ない
事であろう。A13に黒土
の落ち込みがあり、第1号
土塗とする。

昭和50年10月11日

第1号土塗と決定した遺
構を掘り下げていくと、こ



発掘風景

第Ⅱ章 調査の経過

れから多量の土器片が出土した。

昭和50年10月17日 第1号土塹の掘り下げを完了し、その清掃を終了し、写真撮影を済ませる。午前中で一応、下のトマト畑を終了し、午後より、青刈り畑の掘り下げを実施し、遺物は相当量の出土をみたが、それに伴なうと推定できるような遺構は検出されなかつた。

昭和50年10月20日 昨日に引き続き、青刈り畑のグリット掘りを開始してみると、遺物は多数出土したが、遺構の検出はみられなかつた。疊層の堆積がいたるところにわたって、存在していた。疊層の岩質は大部分、粘板岩質であった。

昭和50年10月21日 青刈り畑のグリット掘りを北へ、北へと延長していくが、遺物は多量に出土するが、遺構の検出はなかつた。

昭和50年10月22日 青刈り畑のグリット掘りを完了し、南の方へグリットを設定し、発掘を開始し、遺物は多量に出土したが、本日の段階では遺構の検出はみられなかつた。

昭和50年10月23日 遺跡の全景写真を終える。これをもって発掘を終えるが、あとで耕作をしたいとの地主の希望のために埋めもどしをする。その埋めもどしの方法は疊を下に埋めるようにした。

昭和50年10月25日 掘りおこした地区的埋めもどしを完了するようにしておく。

昭和50年10月27日 第1号土塹の清掃と写真撮影、並びに実測図の作製、全測図の作製。

昭和50年10月28日 第1号土塹附近の埋めもどしと、テントのとりこわしをする。

(小池 政美)

第Ⅲ章 遺 構

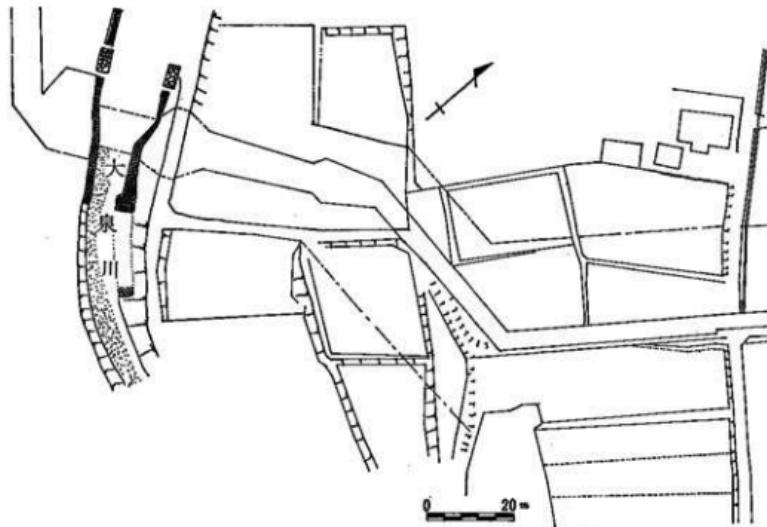
第1節 土 括

第1号土括（第4図、図版3）

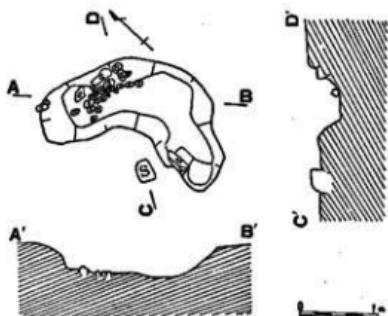
本土括の現況はトマト畑で、耕作土層面より約1m位下った黄褐色土層面を掘り込んで、つくられている。大きさは南北95cm、東西2m20cm位で、壁高は南40cm、北20cm、東30cm、西45cm位である。壁の状態は全般的になだらかであり、多少の起伏が存在していた。床面は黄褐色土層の極めて良好なる叩きであり、多少の凹凸があった。

壁面や床面に在存する大小さまざまな石は大部分がホルンヘルスや粘板岩の自然石であった。遺物は覆土中より、縄文中期初頭から加曾利E期にわたる広範な時期にわたっていたが構築された地形面が土砂の流入の多い場所だけに、時代決定はむづかしいが、最も新しい加曾利E期と考察するのが適当ではないかと思われる。

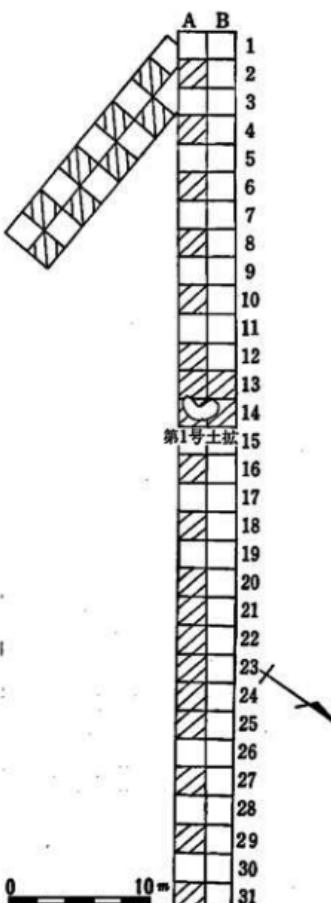
（小池 政美）



第2図 遺跡分布の構図



第4図 第1号土器実測図



第IV章 遺 物

第1節 土 器

第1号土器の出土土器は第5図(1~12)で、大きく3時期に分類できよう。それは縄文中期初頭、縄文中期中葉、中期後葉である。(1~2)は平行沈線による文様が、縱走したり(1)、體目状(2)に施されており、これらは同時期のものと考えられる。色調は黒褐色を呈しており、1は多量の雲母、2は多量の長石を含んでいる。

(3~4)は連續爪形文が主体文様となり、(3)は破片下部に橢円形状の横位隆帶文を配し、その中に爪形文を入れてある。4は破片上部に山形状に隆帶を付け、その上に刻目を押捺してある。3は黒褐色、4は明褐色を呈し、双方とも多量の雲母を含んでいる。5の文様は大般において、3の下部文様と類似している。ただ、相違点は無文帶が全体の5分の1を占めている点にある。多量の雲母を含み、黒色を呈している。

第三章 造 物

(6) は山形状口縁の破片であり、口縁のカーブに沿って、山形状に連続爪形文を形成しそれらの下部は直径2cm程の円形状の突起をつくり、その表面に同心円状に連続爪形文を4重に施してある。多量の雲母を含み、黒褐色を呈し、焼成は良好である。

(7~8) は勝坂期によくみられる櫛形文様に類似的なもの、7は隆帯文があり、その上は無文であり、8はその上に刻目が付加されている。色調は双方とも黒褐色である。

(9) は粘土紐と沈線の発達があるもの。黄褐色を呈し、雲母を含み、焼成は中位である。(10)は粘土紐と刺突文の文様が全体的な構成をしているもの。色調は黄褐色を呈し、焼成は中位である。(11)は繩文地に粘土紐の貼り付けのあるもの、多量の雲母を含み、色調は黒褐色を呈する。(12)は繩文が主体なる文様で、黄褐色を呈し、長石粒を含んでいる。

遺構外出土土器

1は破片の中央部付近に上下に厚く、また太い隆帯を付け、その上に二つの指頭圧痕文を配し、隆帯の周辺部には細線を無数にわたって不規則に配してある。黒明褐色を呈し、多量の雲母を含み、焼成は中位である。

(2~12) は隆帯の発達が顯著なものである。隆帯の文様に限定してみると、上に刻目のあるもの。(2~3, 6~7, 11)、無文のもの。(4~5, 8~10, 12)、隆帯自体が鍵状になっているもの(5~6)とバライティーに富んでいる。隆帯以外の文様に着目してみると、区画文(2)、櫛形文(3, 9, 10~12)、ムカデ文(4, 8)、櫛状施文具による刺突文様(5)、太い沈線(7)等に考えられる。

12に於いては、円周のカーブに近い口縁部を成している。色調は茶褐色(2, 7)、黒褐色(3, 5)、明黃褐色(4, 8, 11)、赤褐色(6, 12)、黄褐色(9~10)である。どの破片に於ても、少量の雲母や長石を含み、焼成は中位であった。

(13~14) は太い勝坂期特有の繩文の破片であり、黄褐色を呈していた。(15~16) は細い条線が無数に乱れて走っているもの。明褐色を呈し、焼成は普通で、多量の長石を含んでいる。(17~18) は太い粘土紐を貼り付けてあるもの。その他の文様として沈線(17)、刺突文(18)が入っている。17は赤褐色、18は黄褐色を呈し、焼成は普通である。

(19~23) は繩文が主体文様である。(19~20) は繩文地に横位の沈線を、21は蛇行状の懸垂文を、(22~23) はゆるやかなカーブ状の沈線文をつけてはあるが、全般的に文様としては単調であった。色調は明褐色(19~23)、黄褐色(20~21)、黒褐色(22)であった。

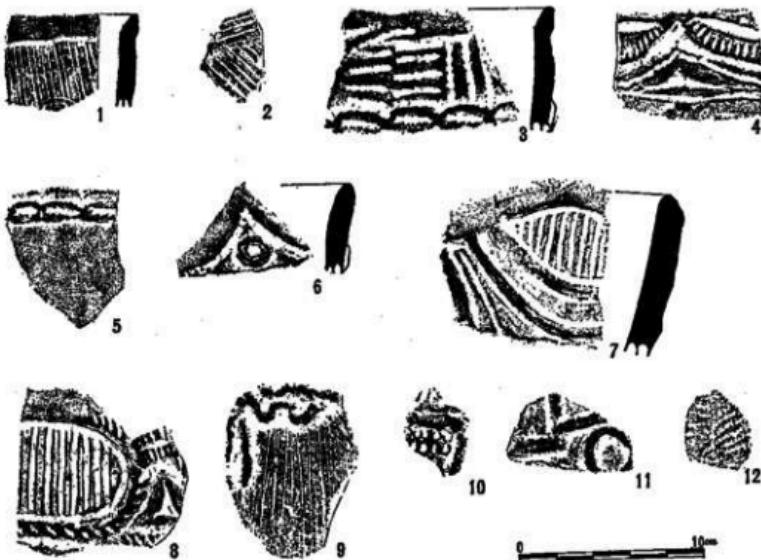
第五章 遺物

(24~25) は口縁部または口縁部の近いところに粘土紐を蛇行状に貼り付けてあるもの。24はその下に円形状の刺突文を押捺してあった。赤褐色を呈し、焼成は良好であった。

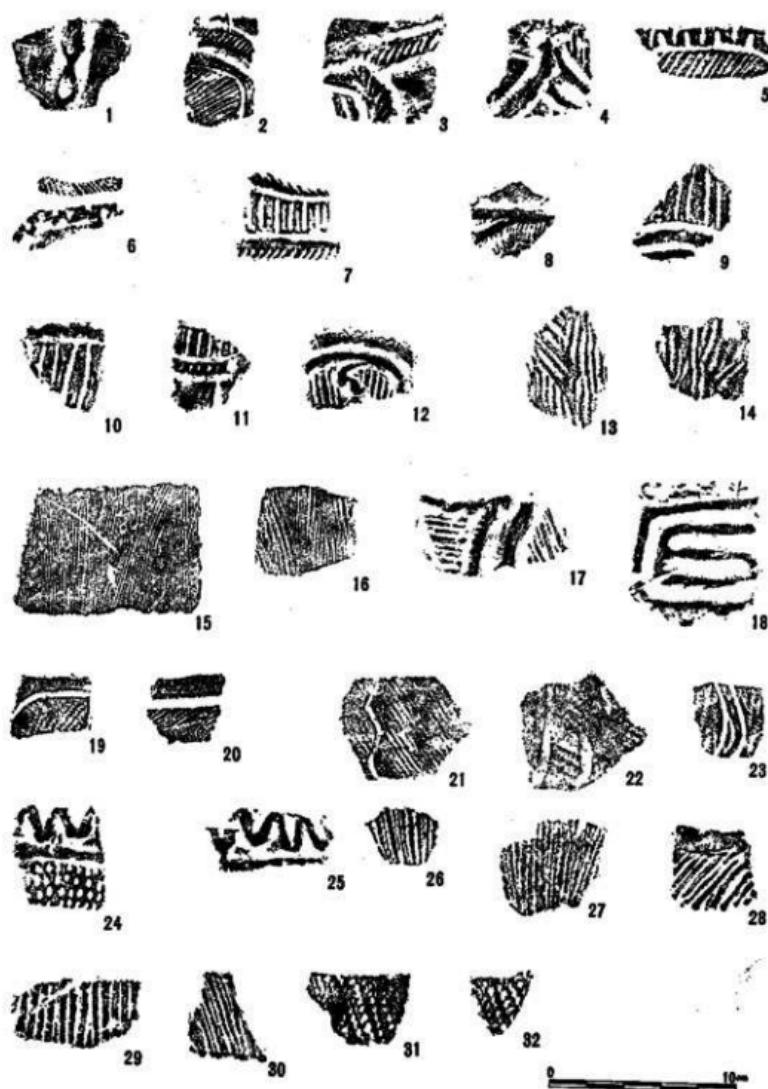
(26~27) は小さな爪形刺突文を施してある。赤褐色を呈し、長石を含み、焼成は良好であった。(28~30) は平行沈線文が斜走や縱走している。28は黒褐色、29は黄褐色、30は赤褐色を呈し、焼成は良好であった。

(31~32) は破片全面に繩文が及んでいるもの。31は黒褐色、32は黄褐色を呈している。以上、主たる繩文土器の破片について、簡略な説明を加えてきたが、破片は全て繩文中期時代に属し、細別してみると、それは初頭から後葉まで全てを含んでいる。したがって、全盛期は繩文中期全般を通じているものと思われる。

(小池 政美)



第5図 第1号土塗出土土器拓影



第6図 遺構外出土土器拓影

第2節 石 器

塚畠遺跡より出土した石器の総数は10点である。これらの石器は第1号土塗及びトレンチ内より発掘され、前者のは(1~3)、後者のは(4~10)である。本来ならば遺構あるいはその他の理由で分類すべきはずであるが、数が少量なので、ここでは石器を一括して取り扱うことにする。また当遺跡は、縄文中期の単独遺跡と考えられるからして、これらの石器類をすべて中期として考えても差しつかえないと思われる。

石器は各形態によってA~Cに大別でき、さらに細分される。Aは打製石斧、Bは磨製石斧、Cは磨石に分けられる。

A:(1)は短冊形の打製石斧である。石器の上半部の中央と下部左側縁に自然面を残しており、刃部は割合に雑である。石質は綠泥岩を利用している。

A:(5~10)は撥形の打製石斧である。(6~7, 9)は完全な形、(5, 8)は上端部が崩切り状になっている。(3, 10)は上半部が欠損している。(5~10)の全ての石斧について共通することであるが、自然面が全く残されていない。石質は(3~7, 10)は粘板岩、(8~9)はホルンヘルスであった。

B₁(4)はどちらかといえば乳棒状よりも定角式に近い磨製石斧であるが、完全な定角式とは断面図でみるとわかるように異っている。下部は大きく欠損してしまっている。

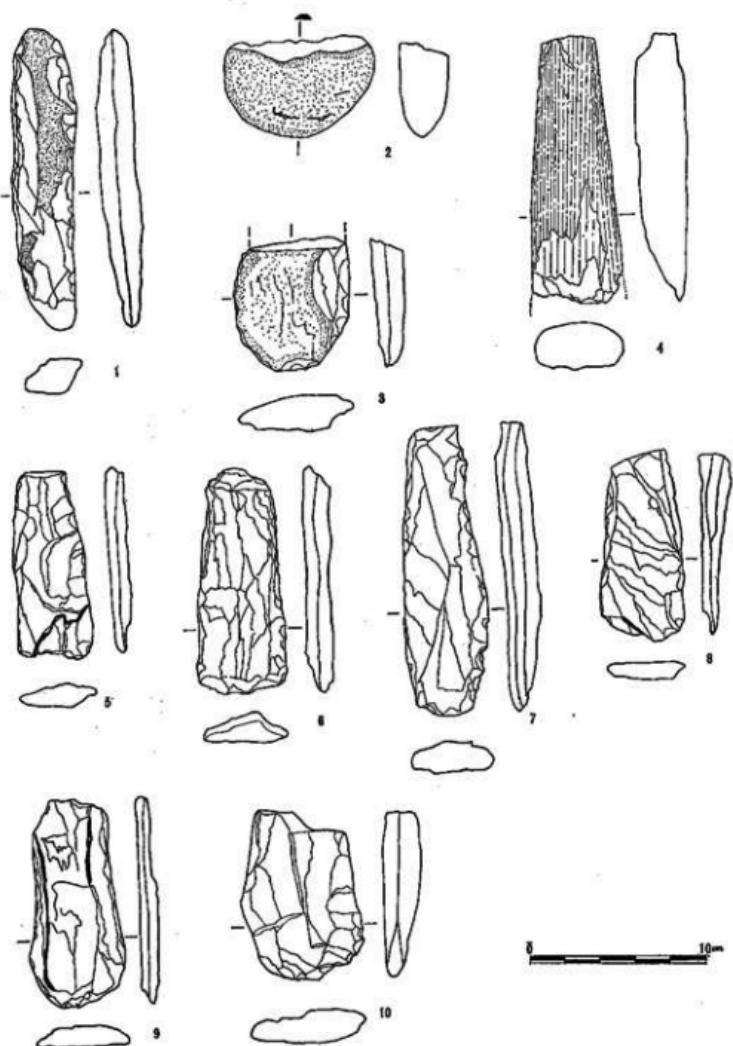
石質は蛇紋岩である。

C下半部が欠損しており、また磨石としては周縁あるいはその近くに利用された痕跡を認めることができない。石質は硬砂岩である。前行で説明した諸状態より一応、磨石として取り扱ってみてみたが、よく吟味してみると磨石という名称では一抹の不安が残る。しかし仮りに、たたき石と考えてみると、同名称を実証するような敲打の痕跡はどこにも発見されなかったことをここに記しておくことにする。

石質についての問題点としては当遺跡地の疊層はホルンヘルスや粘板岩がその骨格を成している。硬砂岩、蛇紋岩、綠泥岩は下部流域の水系より運搬されてきた可能性がきわめて大である。

(小池 政美)

第7章 遺 物



第7圖 石 器 測 量 圖

第Ⅴ章 所 見

伊那市西箕輪大泉新田地区的調査は今回が実質的にははじめてであった。大泉川の河岸段丘、あるいは山麓扇状地の2つの環境条件は、縄文中期に於いて住民に相当な利便を提供したものと思われる。この2条件の延長された一帯には、中道南、桜畑、久保田、高根の各遺跡が連なっている。これらの遺跡は、発掘調査はされていない、分布調査によれば、全て縄文中期文化時代であった。前書きはこのくらいにしておいて、今回の調査動機並びにその成果等について述べてみたいと思う。

まず動機については第Ⅱ章、調査の経過の項で、述べさせていただいた様に、この地区は送水管のルート内であったために、発掘調査をする運びとなった。ルート内の幅4mという限定された地域だったので、塚畠遺跡自体の全体を把握できずに終了してしまったが、今回の調査では、分布調査の知見を証明するかの如くに、縄文中期時代全般を通じて、多量の土器片が発見された。土器片を縄年に細分類してみると、まず最初が平出A式、次に勝坂I、勝坂II、勝坂III式がみられ、最後に加曾利E I式、E II式が位置づけできると思われた。遺構としては、土括が1カ所発見され、なかより多量の縄文中期初頭から後葉にかけての土器片の出土をみたが、時代決定を考えてみると、最後の縄文中期後葉の加曾利E式を本遺構の時代と決めてよからう。したがって、縄文中期初頭や縄文中期中葉の土器片は土砂の流入と一緒に混じってきた可能性が一般的に強いように思われた。出土した土器片については、極だった差はないようにみうけられた。したがって、遺物に関しての新知見は全く何もないようと思えた。最後に、発掘調査に協力をおしまなかった友野良一団長並びに調査員各位、あるいは、それに直接的に協力をおしまなかった関東農政局伊那西部農業水利事業所職員一対同して深甚なる感謝をする次第であります。

(小池 政美)

図 版



遺跡地を南側より眺む



遺跡地を北側より眺む



大 泉 川



グリットを南側より眺む



土器出土状況



石器出土状況



第 1 号 土 坑

塙畠遺跡緊急発掘調査報告書

昭和51年3月15日 印刷

昭和51年3月20日 発行

発行者 伊那市教育委員会

印 刷 所 中央印刷株式会社
岡谷市川岸108

